２年「美術Ⅱ」の授業の様子です。

令和４年１１月１０日

塑像制作

人の身体で、日ごろ最も長い時間目に入る部位は手でないでしょうか。そして、そのほとんどの時間は、顔や体と違い、無意識に視界に入っているだけともいえるでしょう。高校美術の意義の一つとして学習指導要領では、「創造的な表現の構想」とありますが、これは高校に限らず、美術をとおして身につく自己表現、発信力、また、それらのもととなる観察力を育むのに大切なものです。「手」という普段何となく目にしている対象に向かって、改めてその造形的・機能的美しさを解釈し表現することは、とても大きな意義を持つでしょう。高村光太郎の「手」やアルブレヒト・デューラーの「祈る手」など、古今東西の先人たちが、手をモチーフにして名作を生み出してきています。ここにある作品をつくった生徒も、いずれ、その先人たちと位列するかもしれない。そんな楽しみを持って授業をしています。

生徒の声

手の「表情」をリアルに造形するために、自分の手をよく観察しました。様々な角度から沢山デッサンをすることで資料を増やしていきました。着色の際に気をつけたことは、角度によって色や凹凸の加減が変わって見えるので、色を薄く重ねていったりして、より自然な手に近づけていけるような工夫をしたことです。

今回、この作品をつくった中で頑張ったところは、手の形と手の甲の色塗りです。まず、手の形はどのような角度から見ても違和感がないようにしました。他にも指の肉の感じや手の甲の骨なども再現できるよう努力しました。手の甲の色塗りでは、骨が出ているところは明るく意識して塗り、肌は下に緑を入れて「血管ぽさ」を表現しました。

自分の手を作ったんですけれど、色を塗る前は、まあいい感じだった。「粘土が嫌いな私がよくこんなキレイにできたな！」と思っていたんですよ。ちゃんとデコボコが強いところは「ボコッ」とさせたし、いい感じだったんですよ。だけど、色を付けたら失敗しました・・・。ちなみに、この手は未完成なんです。地面にたたきつけて完成なんです。（笑）

あえて爪を欠けさせてみたり、関節の線を増やしたりして、職人の手を目指して作ってみました。特にお気に入りのポイントは、親指下の肉感をしっかり目に入れた後、暗めの色を入れたり、第３関節をデカく！尖らせて少し不器用そうな雰囲気を目指しました。